【海外留学レポート】

決意

-留学までの道-

Decision: Road to Study Abroad

永進専門大学[1]国際観光学科１年　**木本　夢乃**

KIMOTO Yumeno

(Yeungjin College)

キーワード：韓国留学、専門大学、国際観光学科

幼い頃から私にとって韓国は身近な国だった。あの頃の私は、まさか今自分が韓国で大学生になっているとは思いもしなかっただろう。物心ついた頃から、私の家ではテレビで韓国ドラマや韓国のバラエティが流れていた。韓国のアイドルに夢中になり、小学生の頃はハングルを勉強した。好きな俳優さんの出演するドラマを、母と夜が明けるまで見た経験もある。料理が好きな母は、韓国料理もよく披露してくれた。このように、私は韓国という国の文化に触れながら幼少期を過ごした。そんなことから私の中では「韓国」という国の存在が当たり前であった。当たり前の存在であるからこそ、留学という夢を描くことはなかった。むしろ、日本を出て海外の人と触れ合い、生活をしたいなど考えたこともなかった。

そんな私のきっかけとなった出来事は、高等工業専門学校三年生の冬、彼らに出会ったことだ。それは私を痺れさせるなんとも刺激的で、貴重な 2 週間だった。その頃の私は工業専門学校という、五年一貫制の学校に通っていた。大学受験も、特に希望しなけ

写真 1　永進専門大学

[1] http://yjc-kr.com/

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ればする人はいないし、成績も一定の基準を満たしていれば留年することもない。普通高校三年生の冬というと受験シーズンまっしぐらであるが、私たちの学校はエスカレーター式で五年生まで進級できるというわけだ。三年生ともなると学校生活には慣れているし、授業に行くのが億劫になることもしばしあった。そんな時、ある先生が声をかけてくださった。「韓国から学生が短期留学しにくるけど、ちょっと交流してみたら?」あとで知った話だが、その先生は私が韓国に興味があることを知って声をかけたのは勿論、学校でなんとなくつまらなさそうに過ごしている私を気にかけてくださったそうだ。

今まで海外の学生と触れ合う機会はゼロだったし、思えば韓国という国はすごく好きなはずなのに、その国で実際に生活している、自分と同年代の人達のことに関しては無知であることに気付いた。彼らとは放課後一緒に遊んだり、同じ授業を受けたり、休日に一緒に出かけたりした。彼らは日本語を専攻しており、同年の春に就職を控えていたため、日本語は堪能であった。私は気になったことをいくつか投げかけてみた。「いつから日本語を勉強し始めたのか」「どうして日本に就職しようと思ったのか」「どうしてそんなに勉強熱心なのか」という内容だ。彼らは約 7 カ月の猛勉強で日本の会社に内定をもらっており、勉強することに意欲的であり、母国以外の言語を使ってコミュケーションを取ることが本当に楽しくてやりがいがあるんだと言った。また、世界に出て働くことに希望を抱いていた。彼らのそんな言葉や学ぶ姿勢ひとつひとつ、全てが私の今までの価値観を大きく変えた。私は今までなんて狭い世界を見てきたんだろう、もっともっと色々な人と関わって、色々な経験をしたい、もっと自分を輝かせたいと思った。

また、彼らのように母国以外の言葉を使うことができればさらに多くの人と出会うことができるのでは、と考えた。その時から私は少しずつ韓国語を独学で勉強し始めた。といっても、今までは意識せずに見ていたドラマ、意識せずに聴いていた音楽を少しずつ意識するようにして、少しずつでも身につけようと思った。また、親しくなった韓国の学生と韓国語を使ってメッセージのやり取りをしたり、会話をしてみたり、積極的に韓国語を使い同年代の友達と話せることが私の楽しみになった。今まで学校に行くことが億劫だったこともあった私が、彼らと会って同じ時間を過ごせることがすごく貴重なものに思えた。思い返してみれば、彼らに出会う以前の私は、毎日学校に行き、授業を受けて、放課後は友達と遊んだりアルバイトをしたり、テスト期間は必要な勉強だけそこそこにやる、そのローテーションだった気がする。彼らに出会ったことで自分が初めて夢中になって韓国語を勉強したいと思えた。動機はなんでもいい。自分が好きな国の言葉を使い、好きな国の同年

写真 2　キャンパスで友人と
（筆者写真中央）

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

代の人とコミュニケーションがとれるということがただ単に楽しかったのだ。

もっと韓国について知りたい。自分の目で直接リアルな韓国を見たいと思った私は、四年生になる年の春休み、韓国に短期留学をすることにした。実際に韓国の大学で学生と触れ合いながら過ごし、自分の中ではっきりと目標ができた。それは、「韓国で学生になる」ということだった。今まで何の目標もなかった私が、韓国の学生との出会いがきっかけでこのような目標を持てたことがとてもありがたく、幸せなことだと感じた。

そんな私にさらに嬉しい報せが届く。同年の夏、韓国留学のプログラムが学校で開催されるというものだった。更に成績優秀者には奨学金が出るという内容のものだった。今までなんとなくで過ごしてきたが、夏の留学のために、毎日韓国語の勉強に励むことが日々の楽しみになった。それと同時に、目標が全く違う方向に向かうようになった私とクラスの友達との中で、価値観や考え方のずれが少しずつ広がっていったと思う。私は少しずつ、なんとなく教室に居づらいと思うようになった。

留学準備をしている最中のことだった。留学担当の先生に呼び出された。北朝鮮と韓国の情勢が悪く、留学が中止になったというものだった。一瞬、頭の中が真っ白になった。ほかの場所に留学に行くのはどうか、などあれこれ慰めの言葉は頂いたが、そんなものは私の耳には入らず、ただ、悔しさと苛立ち、そして自分の夢を潰されたことが何より悲しかった。私は学校に行く目標をすっかり失ってしまった。何のために頑張ればいいのかが分からなくなった。友達ともだんだんと疎遠になっていっているような気がして、教室に居場所を自分で無くしてしまった。

だがふと、無理に教室に留まる必要はないと思った。少し気分転換にと、私と韓国の学生を出会わせてくださった先生に会いに行った。その先生は、韓国留学プログラムがなくなったことをすでにご存知だった。唯一、私の空っぽになった気持ちを理解してくださった。学校の先生の立場では応援はできないが、一人の大人の立場として応援する。押しつぶされないで、よく考えて、出た答えが私の進む道だと言ってくださった。

その時私は高専四年生で、海外の大学受験資格は持っていた。考え方を 180 度変えてみた。今、自分がしたいことを我慢して、高専を卒業した後に韓国に行くこと、今、高専をやめて韓国の大学に進学すること、どちらに自分からみて利点があるかをよく考えてみた。私は、居心地が悪いと感じてしまった学校に居続けて、無駄と思いながら学校生活を送るより、目標に向かえる資格を持っているのだから、このチャンスを生かしたいと思った。この選択が正しかったのか、間違っていたのか、分からない。否定してくる

写真 3　永進専門大学キャンパスにて

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

大人も沢山いた。私の目標を全否定されているようで、悩みは尽きなかった。だが、私の話を聞いて、理解してくれる人も私の周りにはちゃんといた。

学校を七月に休学し、そこからはアルバイトを掛け持ちしつつ、韓国の大学入試の準備を始めた。実は、私の日本の学校と、現在通っている永進専門大学は提携を組んでおり、大学選びの際に親切に学部や校内の紹介をして頂いた。他の韓国の大学もいくつか当たってみたが、私が一番興味を引かれたのは、永進専門大学にある、国際観光学科のグローバルクラスだった。この学科では、韓国、中国、日本の同年代の学生が一緒に授業を受ける。グローバルなクラスで色々なことを学ぶことで、色々な文化を吸収しながら近隣の国のことをもっと知ることができる。この学科に入学することが出来れば、毎日１日１日が貴重な体験になるだろうと思い、胸が高鳴った。

現在は自分が希望した通りの学科に入学することができ、毎日授業にアルバイトに特別講議にと、忙しいが自分の実力が目に見えて伸びているのがわかるので、充実している。私の留学生活はまだ始まったばかりだ。これからもっと自分が色々なことに挑戦して、努力して、ひとりの人間として成長していくことを期待している。一日も無駄にしないように、今しかできない貴重な留学生活を自分の糧にしていきたい。

写真 4　キャンパス内の「注文式教育の発祥地」の碑

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.